

坪内良博著

『東南アジア多民族社会の形成』

京都大学学術出版会、2009年

本書は、19世紀のマレー半島のイギリス植民地における地域社会の変容を人口に関する記録や統計を通じて描いたものである。

はしがきにおいて、著者は本書を前著『小人口世界の人口誌』(1998、京都大学学術出版会)の発展形、マレー半島における事例研究と位置付けている。著者は前著において小人口という視角から東南アジア社会を描いたが、本書では小人口地域に移民が流入することで多民族複合社会が形成される過程を人口動態に着目しながら叙述したものと見える。

本書が依拠した史料は英領マラヤの各行政機関の年次報告書である。序章では19世紀末から1930年代にいたるマラヤ各州の年次報告書の構成が項目ごとに整理されている。年次報告書は植民地期の研究では頻りに利用されるが、その量的な膨大さもあって全体像が明らかにされてこなかった。それを体系的に整理したことは本書の意義の1つであろう。

本論は4部より構成される。第一部は「マレー半島の開発と移民」と題され、海峡植民地(1章)とマレー半島諸州(2章)の機能の分化が描かれる。海峡植民地を介してマレー半島部に移住した華人・インド人労働者により生産された錫、ゴムが再び海峡植民地を經由して輸出される構造が貿易、移民統計や年次報告書の記述から明らかにされる。

第二部、第三部では半島諸地域を3グループに分けて人口動態が分析される。第二部では多民族化が進んだ開発先進地域であるペラ・スランゴール(3、5章)、後発地域であるパハン・ジョホール(4、6章)、第三部ではマレー人が多数を

占めるクランタン(7、8章)・ケダー(9、10章)である。分析は、それぞれ人口動態(出生・死亡統計、移民統計など)および衛生状況(脚気、マラリアなどの疾病についての情報)の2つの側面からなされる。各地域における民族構成や開発の進展の違い、それにとまらぬ衛生状況の差異が描かれる。

第四部では、未開発地域としてトレンガヌの同様の統計分析がなされ(11章)、終章のエッセイにて社会状況が断片的に記述される。そこでは、多民族化には地域差や時差がみられた点、開発が移民出稼ぎ労働者により担われ、それが徐々に一時滞在者から定着人口へと移行していった点、労働者の死亡率が高く衛生政策が重視された点、この時期に成立した多民族社会が独立後の国家運営に影響を与えた点、などが指摘されている。

本書が明らかにするのは、第一には植民地当局のマラヤ社会への認識である。年次報告書における項目、統計の取り方やその記述からは当局の関心の所在および植民地統治の方法論が明らかになる。それにとどまらず、著者は断片的な史料から当時の社会状況の描写を試みている。統計的な不完全性からこうした人口統計は実証研究には使いづらいつとも思われるが、著者は統計の網羅的に収集し、全体の傾向性を浮き彫りにする方法により当時の社会の実像に迫っている。本書のデータは幅広い分野で利用されうるものであり、この蓄積を基盤として英領期マラヤの歴史研究の一層の進展が期待される。

(坪井祐司/立教大学非常勤講師)